〝二股ソケット〟とは何か

足代健二郎

松下幸之助の立志伝において〝二股ソケット〟という商品は、水戸黄門の〝印籠〟と同等の重要な要素である、といっても過言ではないように思われる。

私自身の場合、この〝松下さんが発明した二股ソケット〟の話を誰から聞いて知ったのか、全く記憶にないが、しかしいつの間にかそのことを認識していた。

ある人は、四国の小学校で四年生の時、（授業中、余談として）先生が「松下さんはパンツからヒントを得て二股ソケットを発明した」という話をされたのをハッキリと憶えている――と話してくれた。他の人からも〝小（または中）学生の時、授業中に〟という話を時々聞かされる。

諸書にも、「かの有名な『二股ソケット』」「俗に『二股ソケット』といわれ、松下の立志伝に欠かせない商品」「松下の名前を全国的なものとした『二股ソケット』」などの記述が散見される。（注）

ではこのように、いわば国民的常識となっている〝松下さんの二股ソケット〟とは、一体いかなる形状のものであるのか。またこの点について、世間一般の認識ならびに松下電器産業側の見解は果たして一様であり、また両者は一致しているのであろうか。

そもそも私がこの問題にこだわるようになったのは、次のような事情による。

まず松下幸之助の自伝である『私の行き方 考え方―わが半生の記録―』（ＰＨＰ文庫）に出てくる【二灯用差込みプラグ】という商品名（これには、パンツ型をした二股ソケットの写真が掲載されている［次頁写真①参照］。ただし次の版以降は改訂されるという）、この用語の意味がよく理解できず、この疑問がずっと頭の中に蟠っていた。

このことについて、豊沢豊雄著『発明特許に賭けた　松下幸之助の創業時代』という本の「真相はこうだ」という一節に〝世間でいう二股ソケットの本当の名は【二灯用差込みプラグ】であり、これはソケットではなくプラグだ〟と書かれている（写真はやはりパンツ型の二股ソケット）。

この説明を読んでから、私は頭が混乱してますます訳が分からなくなってしまった。

それ以来、この問題に注意していると、〝二股ソケット〟というこの一見単純な用語に対して、ほとんどすべての文献が事実誤認の過ちを犯していることを知った。

では、なぜそのようなことになっているのか――その実態と原因とを解明することが本稿の目的である。

（注）『日本を創った12人』（堺屋太一著、ＰＨＰ研究所、平成九年）、『大阪の20世紀』（産経新聞大阪本社社会部著、東方出版、平成十二年）、『滴みちる刻きたれば　第一部』（福田和也著、ＰＨＰ研究所、平成十三年）の記述である（記載順）。その〝二股ソケット〟とは、文脈上は松下創業後の第二号自社商品を指している。本稿二五～二六頁（い、ろ、は、）を参照。

一　用語の定義

事物の名称というものはまことに厄介なものである。一語が幾つもの意味を含んでいたり、一つの事物に幾通りもの呼び名があったりするために、思考が混乱したり、正確な情報伝達に支障を来す場合が少なくない。

本稿が解明せんとする問題も、まさしくその点に起因している。そこで、筆者と読者との認識に齟齬が生じないように、予め本稿の中で使用する配線器具名の語義を取り決めておかねばならない。

①**ソケット**＝電球受け口（ただし、「プラグ」というものを受ける場合もある）。ひねりスイッチの付いているものが普通で、これのない「キーレス・ソケット」に対しては「キー・ソケット」という。

②**第一次ソケット**＝天井から下がっている電源コードに直に接続されるもの。

③**第二次ソケット**＝第一次ソケットに螺合して（捻じ込んで）使用するもの。従って、その頭の部分は電球の口金と同様、直径２６ミリの雄ねじである。二股・三ッ股になっているものは通常この第二次ソケットであって、第一次ソケット自体が分岐したものは、現行品としては存在しない。これを第一次ソケットと区別するために、製品名としてはふつう「クラスター」と呼ばれており、二灯用、三灯用、一灯用、そしてその中にもまた色々な種類がある。クラスターの原義はふじの花などの房。

④**二灯用クラスター**＝これを形状で大きく分ければ、「ト」型に分岐した「ト型クラスター」と、左右対称型の二種類になる。これらは通称「二股ソケット」（＝英語では「ツーウェー・クラスター」）と呼ばれる。

⑤**パンツ型クラスター**＝前記の左右対称型にもメーカーによって種々のデザインのものが発売されていたが、松下製のものはショート・パンツを連想させるところから、本稿では特に「パンツ型クラスター」と呼ぶ（写真①参照）。これも勿論「二股ソケット」の一種である。

写真①　パンツ型クラスター
（松下新型二灯クラスター）

⑥**差込みプラグ**＝電源に差し込むタイプの接続端子。並行した二枚の平刃（＝並行二枚栓刃）のものが普通であるが、栓刃の形状・

並び方・枚数の異なるものもある。これらの差込みプラグには「キャップ」という呼び名もあり、本稿の『付記』で「ポニーキャップ」という商品にふれる。

⑦**タップ**および**コンセント**＝どちらも電気の出口（outlet）で、差込みプラグの受け口であるから本来は同じものである。タップの原義は水道などの蛇口。コンセントは〝（プラグが一カ所に）集中する〟という意味のconcentrateから採った、米ブライアント社の商品名だという。本稿ではクラスターと一体式のものを「**サイドタップ**」、壁付けのものを「**壁コンセント**」と呼ぶ。

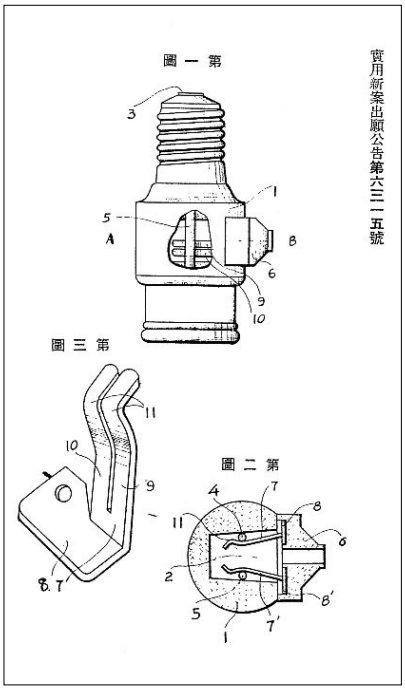
⑧**一灯一差**（さし）＝前記「ト型クラスター」の分岐の片方が、差込みプラグの受け口（＝**タップ**）となっているもの。英訳は〈シングルソケットwith ワン・**サイドタップ**〉。これも「二股ソケット」の一種といえよう。松下電工の商品名・商品番号・発売年は「**差込ト型クラスタ**（WH302 1）」昭和八年発売（写真②参照）。電球受け口を◎、タップを⑪で表すと、一灯一差は◎⑪、一灯二差（ツー・**サイドタップ**）は◎⑪⑪、二灯一差は◎◎⑪と表示される。

写真②　一灯一差＝差込ト型クラスタ

⑨**アタチン**＝電源（ソケット）に捻じ込むタイプの接続端子。アタッチメント・プラグの略称。意訳すれば「（電源に）接続するためのプラグ」ということになろう。松下電気器具製作所創業後の第一号自社商品。ねじの部分は電球の口金と同じE26（＝エジソン型、直径26ミリの口金）。当時の一般家庭には、まだ壁コンセントはほとんど普及しておらず、天井から下がっているソケットを唯一の電源としていた。従って延長コードや他の電気器具（アイロンなど）のプラグは、現在のような差込みプラグではなく、電球と同形の口金を持つ、このアタチンが一般的であった。

（注）

⑩**【二灯用差込みプラグ】**＝松下電気器具製作所の第二号自社商品で、アタチン以上に大ヒットした。既に他社製品も出ていたが、改良して実用新案を取得。登録上の名称は【差込栓付　栓承口】（承口＝受け口）、商品の略称は【差込み】といったという（『自叙伝』による）。しかし、この商品に対する右の三種類の名称はいずれも分かりにくくて感心しない。機能・目的上から分類するとすれば「一灯一差クラスター（＆差込みプラグ）」あたりがまあ適切ではなかろうか。または〝**差込みプラグ**付き、二**灯用**クラスター〟くらいなら、まだしも分かり易かったであろう。ただ、⑧と異なる点は胴体が二股に分岐しているのではなく、胴体の側面を切り欠いた構造であることと、【**差込栓付**　栓承口】の名の通り、差込み栓（＝差込みプラグ）が初めから付属として付いていることである。また、その差込みプラグや受け口の形状が現行のものとは全く異なっている（次頁図版①・写真③参照）。思うに、この商品は【差込み】という略称が示すように、ソケットに延長



図版①　二灯用差込みプラグ

写真③　二灯用差込みプラグ

コードを接続する際、面倒な捻じ込み式（＝アタチン）ではなく簡単な「差込み式」である、という点を特に強調し、これをセールス・ポイントとしたのではなかろうか。

⑪**プラグソケット**＝差込みプラグの受け口、すなわち【栓承口】の別称。機能としては「サイドタップ」と同等であるが、構造・形状が現在のタップと全く違うので、名称も違うのだとご理解頂きたい（図版①・写真③参照）。松下幸之助は「二灯用差込みプラグ」の次に「三灯用差込みプラグ」を考案。これも二灯用と同様に実用新案を取っている。その登録上の名称は、「多灯用　プラグソケット」である。これを⑩の登録名と対比すれば、〝プラグソケット＝栓承口〟であることが何人にも了解されよう。

（注）大正後期～昭和初期のわが国では、

●銀行・オフィス・邸宅…壁コンセント＋差込みプラグ（平刃）＝主に米国製

●一般家庭…ソケット＋アタチン＝国産品

というのが大勢であったようだ。壁コンセントを必要とするほどの電気製品そのものが、一般家庭には未だほとんど何もなかった時代である。

二　自伝と伝説との乖離

次に〝松下さん考案の二股ソケット〟についての世間一般の認識を知るために、通俗書から三例、知人からの聞書を一例引用してみよう。

イ、『大正史こぼれ話』（藤田舜司著、日本文芸社、昭和五十九年）

「彼が最初に発案して販売に成功したのは、アタチン（アタッチメント・プラグ）と、大灯と小灯が使い分けができる二灯用のクラスターである。」

ロ、『大阪呑気大事典』（大阪オールスターズ編著、ＪＩＣＣ出版局、昭和六十三年）

「電球をはめこむソケットをフタマタに分け、一方をコンセントとし別の電気器具の電源とする。（引用者注―さし絵は写真②と同じ『差込ト型クラスタ』のようである）」

ハ、『誰も書かなかった松下幸之助』（水野博之著、日本実業出版社、平成十年）、『今こそ松下幸之助に学ぶ』（同著、日刊工業新聞社、平成十四年）（下記は両書を合成）

「当時の照明といえば、蛍光灯などといったものは存在せず電球だけで、その電球がソケットから一つぶら下がっている。夜、寝るときはその電球を暗い小さなものに取り替えないといけない。（これは大変な手間だ。チョンと切り替えられれば大変便利である。）何とか簡単なやり方はないものか、とおもいついたのが二股ソケットである。」

ニ、T氏の話（四十代男性）

「松下さんは〝国民ソケット〟を発明した人。紐を引いて豆球に切り替える。」

イとハは恐らくニと同じように、プル・スイッチで点滅や豆球への切替えができるものをイメージしているのであろうと思われる。イには二股ソケットという言葉は使われていないが、二灯用のクラスターと書かれているから、これは二股ソケットと同じ意味である。

ニの〝国民ソケット〟というのは昭和十年発売の松下の製品で、これは創業時代のものではないが、〝国民の〟＝〝ナショナル〟であるから、この解釈は一応筋が通っているといえる（後述）。

ロは前記の⑧一灯一差＝「差込ト型クラスタ」に該当するであろう。

いずれにせよこれらは松下の創業時代の製品ではない。以上の例に見られる通り、世間一般の認識というものはあやふやなものであり、人によって区々であることが分かる。

次に会社側の見解はどうなっているだろうか。

い、『自叙伝』（松下幸之助著、松下電器産業、昭和十七年。現在でもPHP文庫『私の行き方 考え方―わが半生の記録―』として刊行されている）

「次に考案発売したものは【二灯用差込みプラグ】であった。この【二灯用差込みプラグ】は、当時、東京と京都で製作されていて、相当便利な器具として大いに売れていたが、品質的に見てまだまだ改良の余地があったから、いろいろ工夫して実用新案をとり、売り出したものである。ところがこれは前の『アタチン』にも増して大好評であった。」

とあるものの、そのあとの文章にも「二股ソケット」の語句は一切出てこない。

ろ、『創業三十五年史』（松下電器産業、昭和二十八年）「第二章　創業時代　1　業界に衝撃を与えたアタッチメントプラグと差込プラグ」

内容は大体『自叙伝』の通りである。この第1節の後も自転車用砲弾型ランプ、ラジオ真空管、角型（ナショナル）ランプと続き、次の「第三章　基礎かたまる」においても、ラジオ、乾電池というふうに松下製品の歴史が語られるが、ここにも勿論「二股ソケット」の語句は出てこない。

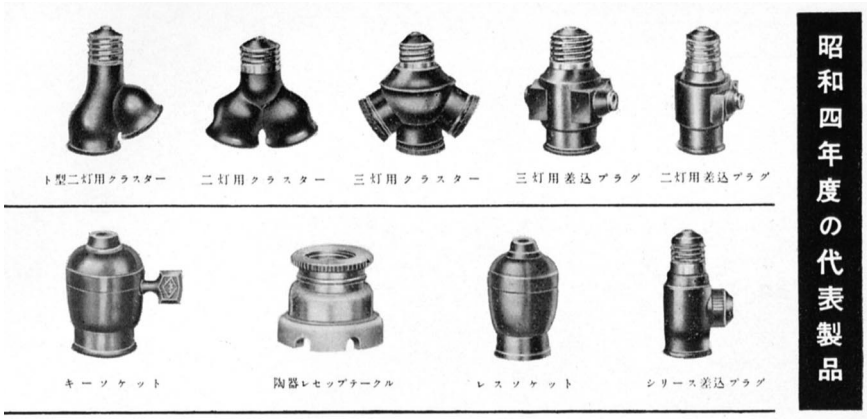
そして、「第三章」の中に「昭和四年度の代表製品」の写真ペ

ージがあり、そこに【二灯用差込みプラグ】や「二灯用クラスター」「ト型二灯用クラスター」などの写真が掲載されている。これらの写真（商品）と写真説明（名称）とはきちんと対応している（写真④参照。写真は部分）。

は、『松下電器五十年の略史』（松下電器産業、昭和四十三年）

この社史においても、「二股ソケット」の用語は一切使用されていない。

しかし、写真説明が『創業三十五年史』と異なる。詳しくいうと、「（パンツ型）二灯用クラスター」の写真に対して【二灯用差込みプラグ】という説明が付いている。



写真④

この間違いが、その時点で速やかに訂正されなかったために、その後遺症が今日まで尾を引いている。その一例として、『画伝松下幸之助　道』（沢田重隆・画、松下電器産業広報本部、昭和五十六年）でも、「（パンツ型）二灯用クラスター」のさし絵に対して文章は【二灯用差込みプラグ】となっている。

また児童書・一般書その他の例を挙げれば、

に、児童書・一般書その他

に—1『〈文研児童読書館〉世界の経営者　松下幸之助』（中村寿雄著、文研出版、昭和四十五年）

に—2『〈少年少女ドキュメンタリー⑦〉世界の松下・ソニー・本田』「世界の経営者・松下幸之助」（片方善治著、偕成社、昭和四十五年）

に—3『〈少年少女20世紀の記録31〉電器の世界をひらく　松下幸之助』（大隈秀夫著、あかね書房、昭和五十一年）

に—4『太陽№２０５』「大発明・珍発明５００集」（平凡社、昭和五十五年）二四頁

に—5『道程　松下幸之助』（日本ビジネスライフ社編集部編著、村木敏美・絵、同社、昭和五十九年）

に—6『「劇画」松下幸之助——苦難と栄光のヒューマンドキュメント』（川崎のぼる・画、白取春彦・作、サンマーク出版、昭和六十三年）

に—7「月刊経営塾」臨時増刊号『一冊まるごと松下幸之助』（経営塾、平成六年）表紙イラストおよび「松下幸之助百年史」

一四八頁

に―8『特許から見た産業発展史』（特許庁、平成十三年）三五頁

に―9『関西電力五十年史』（関西電力、平成十四年）一三七頁

に―10「わが街は故・松下幸之助氏ゆかり」（朝日新聞大阪市内版、平成十五年九月三日）

これらにはすべて「パンツ型クラスター」の写真（に―5、6は画）が掲載されていて、「二股ソケット」（に―4、5、8、9）または【二灯用差込みプラグ】（に―8を除く1～10）の説明が付されている。

これらを概観すれば、〝【二灯用差込みプラグ】＝パンツ型クラスター＝二股ソケット〟である、という観念が『松下電器五十年の略史』以降、完全に定着してしまっていることが分かる。

ほ、『松下電器の技術50年史』（松下電器産業技術部、昭和四十三年）

「昭和2年に出願され、昭和3年8月2日に実用新案第１１９４２９号として登録されている」ところの、〝キーソケット自体をト型に分岐させたもの〟、これを「二またソケット」であるとし、【二灯用差込みプラグ】（実用新案第５４０２８号）や二灯用クラスター類とは明らかに区別している。これがこの『技術50年史』の執筆者の見解であったようだ。

へ、『松下テクニカルジャーナル』vol.50・No.6「〈巻頭言〉社内ベンチャーの技術特集によせて」（坂本俊弘著、松下電器産業、平成十六年）

「（アタチンに）続いて開発した二股ソケット、電灯用と**別にもう一つのプラグがついていて**、アイロンなどを同時に使える。（＝太字の表示は引用者）

当時の一般家庭の電気料金は電灯一灯ごとの定額制であったため、この二股ソケットで、ひとつの電灯線から複数の電気器具が使えて、これは便利だということで売れに売れた。」

この（へ）の文章は注意深く読まないと、文中の二股ソケットが【二灯用差込みプラグ】を指しているのか、「二灯用クラスター」を指しているのか、少し分かりにくいかも知れない。

しかし、前段の太字の記述（特に〝**ついていて**〟の語句）から判断すれば、間違いなくこれは『自叙伝』に述べられている【二灯用差込みプラグ】である。この製品の形状は前述の通り、胴体が二股に分岐しているわけではないので、二股ソケットというイメージとはぴったりしないところがある。しかしこれも電気を二股に分けることには変わりがないので〝二股ソケット〟と呼称することに何ら差し支えないと私は思う。このことは最後にもう一度述べる。

三　自伝と伝説との調整

では、に―1～10のような観念はいかにして生まれてきたのだろうか。

に―4「大発明・珍発明５００集」（昭和五十五年）の執筆者の一人に豊沢豊雄という人がいる。当該記事（二四頁）はこの人の執筆ではないかも知れないが、内容にタッチしている可能性もある。

そして、これに続いて翌五十六年に同氏著『発明特許に賭けた　松

下幸之助の創業時代』（本稿次章での記号＝**D**。実業之日本社）という本が刊行されている。その第6章「伝説的になった二股ソケットの発明」の第2節「真相はこうだ」に次のように書かれている。

二股ソケットの発明の正しい名は、二燈用差込みプラグである。

後述するが、文面上はこの定義は決して間違ってはいないのである。しかしここで豊沢氏が言うところの二燈用差込みプラグとは、実はパンツ型クラスターのことを指している。すなわち名前と実物とが一致していないのである。そして氏は、この誤った前提に基づいて次のようなややこしい論理を展開している。曰く、

①ソケットというのは、電球などを電源に連結する器具のことである。天井からぶらさがっているもの、電球などを**差し込むもの**、すなわち、雌のほうである。

②ところが、プラグというのは、このソケットに**ネジ込むもの**、**差し込むもの**、つまり雄のほうのことである。

③このプラグの口が一つのものがアタチンであり、それが二股になっているものが二燈用**差込みプラグ**というのである。

④それを一般には二股ソケットと間違えて呼んでいたのである。

（番号は引用者）

豊沢氏のこの詭弁はなかなか巧妙にできており、簡単には見破りにくい構造になっている。

②の部分では、プラグには捻じ込み式と差込み式がある、と一応尤もなことを言っている。ところがカラクリは①の中に仕組まれており、ここで〝電球などを**差し込む**〟と伏線を張っておいて、③でアタチンやそれを二股にしたと称するものまでも〝**差込み**〟で押し通そうとしているのである。

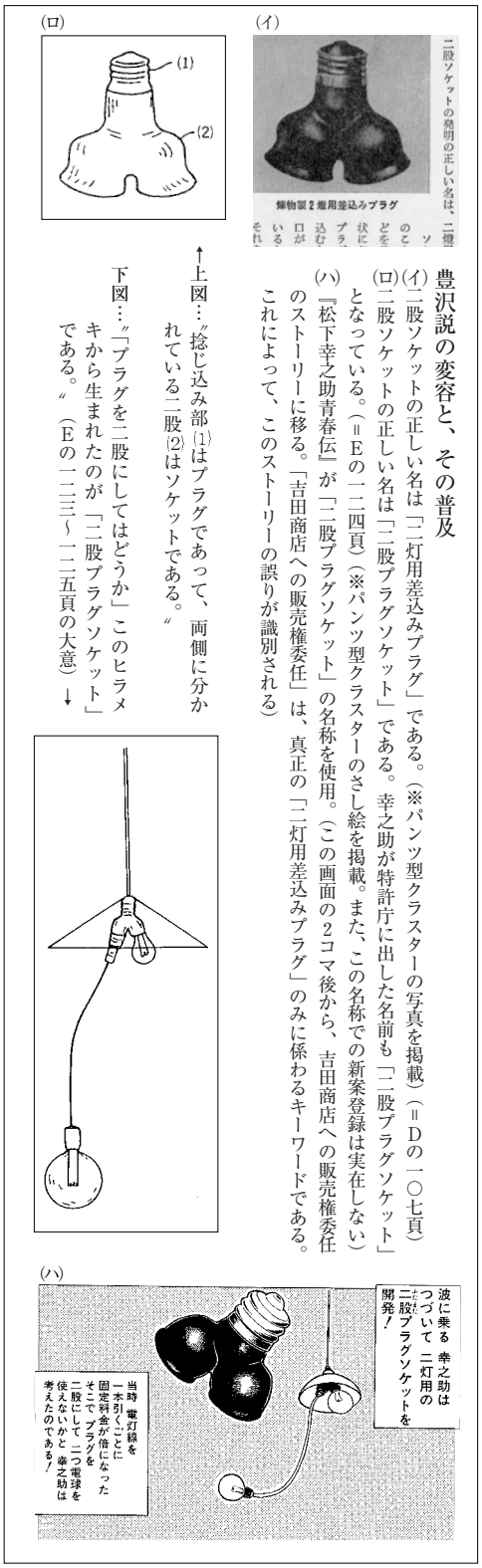
しかも④は何のためにわざわざこういうことを言うのかというと、クラスターもソケットの一種であるということを認めてしまうと、②や③で言ったことと自己矛盾に陥ってしまう。そこでこれは違うということを是非とも強調する必要がある。しかもこのように言うことによって、いかにも厳密で正確なことを述べているような印象を読者に与えることができるであろう。

本稿の第一章「用語の定義」でも述べたように〝二灯用差込みプラグ〟の本質はプラグではない。これは本来なら〝**差込みプラグ**付き、**二灯用**クラスター〟とでも名付くべきものであり、その本質はクラスターである。

この製品の名称に含まれている〝プラグ〟の語は、クラスター本体に差し込まれている付属の〝差込みプラグ〟を指している。

豊沢氏はこれを、本体頭部の捻じ込み式プラグのことであると強弁して、妙な論理を展開しているのである。この解釈が誤りであることは、この製品の「**差込**栓付　栓承口」という正式名称の中の〝**差込**〟の二字の意味を静かに考えれば自ずと明らかであろう。

なお、同氏はその後、昭和六十三年に『松下幸之助の生い立ちに学ぶ―アイデアが成功のもと―』（本稿次章での記号＝**E**。日本教育新聞社出版局）という著書の中で上記の論理をさし絵入りでさらに入念



図版②

豊沢説の変容と、その普及

(イ)二股ソケットの正しい名は「二灯用差込みプラグ」である。（※パンツ型クラスターの写真を掲載）（＝Dの一〇七頁）

(ロ)二股ソケットの正しい名は「二股プラグソケット」である。幸之助が特許庁に出した名前も「二股プラグソケット」となっている。（＝Eの一二四頁）（※パンツ型クラスターのさし絵を掲載。また、この名称での新案登録は実在しない）

(ハ)『松下幸之助青春伝』が「二股プラグソケット」の名称を使用。（この画面の2コマ後から、吉田商店への販売権委任のストーリーに移る。「吉田商店への販売権委任」は、真正の「二灯用差込みプラグ」のみに係わるキーワードである。これによって、このストーリーの誤りが識別される）

に述べており、ここでは〝二股プラグソケット〟という新たなネームを創出している。

プラグソケットの語については第一章「用語の定義」⑪で詳説しておいた。豊沢氏は、パンツ型クラスターのさし絵を示して、捻じ込み部がプラグ、二股の部分がソケットであるから〝プラグソケット〟だ、と強弁し、しかも幸之助が特許庁に出した名前はこれだ、とお得意のすり替えを行なっている。

これは、恐らく〝差込み〟という語句の処理に窮した挙句、自説にちょうどよい用語を見つけ出してきて、その意味を捻じ曲げて使っているのである。そして、この説が翌六十四年に出た『松下幸之助青春伝』（針木康雄・監修、なかまる修一・画、集英社）にそっくりそのまま採用されて、劇画として描かれている（図版②の(ハ)参照）。

豊沢氏はどうしてこのような誤った説を熱心に唱えるのか。

昭和四十三年の『松下電器五十年の略史』掲載写真の誤りに影響され、引き摺られて、間違った思い込みをしてしまったのであろうか。

もし仮にそうだとすると、松下幸之助の『自叙伝』と二股ソケット説話と社史（『松下電器五十年の略史』）、この三者を合致させ、整合性を図りたいという意識がその誤った認識を助長しているのだ、とも考えられる。

真相は分からないが、一応そのように理解しておこう。

四　二股ソケット伝説の起こりとその後の変容

松下幸之助の自伝や社史に「二股ソケット」の語句が記されていないことは上述した通りである。

ところが一方では「二股ソケット」「地下足袋」「亀の子タワシ」の三つを大正時代の三大発明（または三大便利品）だとする説がある。発明者は松下幸之助、ブリヂストンの石橋正二郎、西尾商店の西尾正左衛門の三人だという（『誰も書かなかった松下幸之助』『今こそ松下幸之助に学ぶ』『関西電力五十年史』など）。

この言説は比較的新しいものだと思うが、前掲、に―8『特許から見た産業発展史』（特許庁、平成十三年）三五頁にも西尾正左衛門の「亀の子タワシ」と松下幸之助の「二股ソケット」とが並べて紹介されているので、これらが大正時代の代表的な発明品という認識は割合広く行き渡っているのかも知れない。

松下幸之助の二股ソケット考案をテーマとして取り上げた文献で、昭和四十三年以前（＝『松下電器五十年の略史』以前）に刊行されたものは、私の現在知る限りでは次の三例乃至五例である。

A、『発明は誰にもできる』（豊沢豊雄著、実業之日本社、昭和二十六年）一頁、序文

B、『発明伝記物語―発明はこうして生まれた―』（『六年の学習』五月号第二付録、指導・豊沢豊雄、学習研究社、昭和三十三年）第5話「世の中を明るくした二またソケット」（文・藤原一生）

※【後述―Ⅰ】『〈少年文庫⑥〉電器王　松下幸之助』（海藤守著、少年画報社、昭和三十八年）【

※【後述―Ⅱ】『ジュニア版　松下幸之助』（二反長半著、盛光社、昭和三十九年）

（※この二書は「二股ソケット」の語を使用しておらず、話の趣きも他と異なるので後の章で別途取り上げる。発行年の順序に従って参考までにここに掲出したのである）

C、『道徳資料による　人物・伝記の教材研究―中学校編』（勝部真長ら編、文教書院、昭和四十一年）四二頁、「松下幸之助」

（注）本書は中学教師向け道徳指導用の副読本であって、該当の部分は『文部省編　中学校道徳の指導資料　第1学年第1集』（昭和三十九年）から採られているようである。

手元の資料が乏しいので、断定的な結論を出す段階ではないかも知れないが、右の五例に拠って見る限り、〝二股ソケット〟というキーワードと〝松下幸之助〟とを結び付けた最初の人物は豊沢豊雄氏ではないかとも推測される。発明学会などの創始者として発明を推奨しようとする立場の豊沢氏にとって、松下幸之助の立志伝は格好の教材なのであろう。

アイデア商品を事業化して一代で財を築いたというだけなら、その材料は「地下足袋」の石橋正二郎や「亀の子タワシ」の西尾正左衛門、その他にも色々な候補が考えられるだろう。しかし国民的人気度という点から、豊沢氏は特に松下幸之助に的を絞ったのに違いない。

A、『発明は誰にもできる』の序文の一部を引用すれば次の通りである。

「『資本金百円。一坪半の工場!!』という恐ろしく小さな資本で、ソケットを製造していた松下幸之助は、『……普通のソケットでは面白くない。もっと便利なソケットはできないものか—』と考えながら、町をあるいていた。すると、ある店で、一本の電線をはさんで、一人は電燈をつけるといい、一人は電気ゴテをつけるといって争っている姿を見た。

松下氏はハタとひざをたたいて、工夫したのが、現在つかわれている『二股ソケット』である。

この発明は物凄くあたった。

売上高二十余億円、発明特許七百余件、ナショナルの名で、すばらしく外貨をかせいだ松下電器株式会社は、この二股ソケットの発明から生まれた。」

B、『発明伝記物語—発明はこうして生まれた—』「世の中を明るくした二またソケット」では、最初のソケットの販売が行き詰まり憔悴しきって歩いていた幸之助が、たまたま通りがかった一軒の家の中で姉と弟が一本の電線をめぐって、アイロンか電灯かで争っているのを見て二股ソケットを考案した、という物語となっている（これのさし絵には「ト型クラスター」が描かれている）。

C、『道徳資料による　人物・伝記の教材研究—中学校編』では、

「（幸之助は）新しいソケットの問題で退社し、自家営業を始めたが、みごと失敗する。そんなある日、一本の電燈線をとり合う姉弟の会話からヒントを得て、ふたたびソケットを考え出した。」

次に『松下電器五十年の略史』以降のものを見てみよう。

D、前掲の『発明特許に賭けた　松下幸之助の創業時代』（豊沢豊雄著、昭和五十六年）には、

「従来のソケットは電燈なら電燈だけしかつかなかった。ところが、幸之助が町に出てあちこちの電燈の様子を見ていると、ある家で姉弟が相争っていた。姉はアイロンを当てたいという。弟は電燈をつけねば本が読めないという。その相争うさまを見てアイデア好きの幸之助は、ハタとひざをたたいて、『ソケットを二股にして、電燈をつけ、またアイロンもつけられるようにすればヒット間違いなし……』

こうして、生まれたのが二股ソケットの発明である。（中略）

以上が従来語り伝えられていた逸話である。しかしこれはかなり脚色されている話である。」（本稿二八頁上段の「真相はこうだ」につながる）

E、同じく前掲『松下幸之助の生い立ちに学ぶ—アイデアが成功のもと—』（同著、昭和六十三年）になると、幸之助は、自分の工場で作ったアタチンプラグを、社員全員に持ち帰らせ、使わせてみて意見を出させた。「一つのアタチンプラグで二つの電球が使えないか」という意見が出て、それなら「プラグを二股にしてはどうか」というヒラメキがわいた（大意）。こうしてプラグを二股にしたものが「二股

	前掲記号	書　　名	刊行年	パンツ型クラスター	第2号製品の主な表記	実用新案	吉田商店
Ⅰ	Ⅰ	電器王　松下幸之助	S 38	写真なし	二灯用差しこみソケット	取得	総代理店
Ⅱ	Ⅱ	ジュニア版 松下幸之助	S 39	写真なし	二灯用ソケット	取得	総代理店
Ⅲ	に―1	世界の経営者 松下幸之助	S 45	写真掲載	二灯用差しこみプラグ	取得	総代理店
Ⅳ	に―2	世界の松下・ソニー・本田	S 45	写真掲載	二灯用さしこみプラグ	取得	
Ⅴ	に―3	電器の世界をひらく 松下幸之助	S 51	写真掲載	二灯用さしこみプラグ	取得	一手販売
Ⅵ		〈PHP愛と希望のノンフィクション〉 松下幸之助	H 3	写真なし	二灯用差し込みプラグ	取得	総代理店
Ⅶ		松下幸之助 勇気のでることば	H 6	写真なし	二またソケット	取得	総代理店

プラグソケット」である、という豊沢氏のチン説（アタチンを二股に改良したものが、世間でいう二股ソケットだ、という説）が述べられている。

さらに同書はそのあとの文で、次のように述べている。

「よく本などに『ソケットの発明に失敗して、年が越せなくなった幸之助が、町の中で姉弟の争っている姿をみた。それは、天井からさがった電灯線を中にして、姉の方はアイロンをかけたいといい、弟の方は本を読んでいるから電球をつけたいという。それを見た幸之助は、ハッと気がついて、ついに二股ソケットを考案した。それが大ヒットしてナショナルのもとになった』

そのように伝説的な話になっている。

しかし本当は、前述のようにプラグから生まれたものである。」

以上A～Eの五例を比較すると、Aは登場人物がB以下と少し異なるが、B、C、D（前段）は内容が全く同じで、物語として非常によくできた感動的な話である。AからBに話が進化したのであろう。ところがD（後段）、Eになると話の趣旨が一転して〝アタチン二股改良説〟に変化している。

豊沢氏の健筆はまことに変幻自在である。

五　【二灯用差込みプラグ】のジレンマ

前章で取り上げたA～Eは、すべて豊沢豊雄系の文献といえる。

一方、少年少女向けの読み物＝児童書のたぐいを見てみると、前掲Bを除けばすべて『自叙伝』の記述に準拠しているので、これらは自叙伝系の文献である。

そして、これを発行年順に並べて、要点を示せば右の表のようになる。

表欄のⅠ～Ⅴの書名等は前掲したので、Ⅵ、Ⅶのみ要項を掲げる。

Ⅵ、『〈ＰＨＰ愛と希望のノンフィクション〉松下幸之助―光と夢をもとめつづけた90年―』（岡本文良・作、高田勲・絵、ＰＨＰ研究所、平成三年）

Ⅶ、『松下幸之助　勇気のでることば』（同作、同絵、同研究所、平成六年）

なお、これら以外の児童書としては『大阪の人物ものがたり』「松下幸之助（昭和の実業家）―人々のくらしをゆたかにしたい―」（大阪府小学校国語科教育研究会編著、日本標準、平成五年）が挙げられるが、これの内容は自転車ランプ・ラジオ・アイロンがテーマで、ソケットには触れていないので、ここでは除外した。

さて、この表からは興味深い事情が読み取れる。

最初に概括すると、このⅠ～Ⅶの七冊の読み物のストーリーはすべて『自叙伝』に則っていることは先に述べた通りである。従って、その物語に出てくるソケットは『自叙伝』記載の【二灯用差込みプラグ】の話である。表の「実用新案」「吉田商店」は【二灯用差込みプラグ】のみに関わるキーワードであって、「二灯用クラスター」の話と混同しないように識別するための指標として掲載した。

そこでもう一度繰り返すが、この製品の本質（使用目的）は〝クラスター〟であって、決してプラグではない。すなわち、第一次ソケットに螺合して、つまり捻じ込んで使用する〝第二次ソケット〟である。一般用語でいえば〝ソケット〟の範疇に入る。

頭部の口金（ねじ）は第一次ソケットに螺合するための〝部分〟にすぎない（豊沢説は、例えば「庖丁には柄が付いている。従って庖丁は〝柄〟である」と言っているのに等しい）。

しかし、このように商品名が【……プラグ】となっていることが、混乱の淵源となっている。

この問題に対し、表のⅠ、Ⅱは「プラグ」の語を「ソケット」と読み替えることで、うまく解決している。特にⅡでは「差しこみ」の語も取ってしまっているが、これが最も賢明な対応だと思う。

ところが、昭和四十三年の『松下電器五十年の略史』の掲載写真によって、『自叙伝』記載の【二灯用差込みプラグ】（実用新案第５４０２８号）＝「（パンツ型）二灯用クラスター」である、という図式が公式見解のようになってしまった。そこでⅢ、Ⅳ、Ⅴの著者は、パンツ型クラスターは頭部がプラグ（ねじ）になっている、ということでこの名称に納得したのではなかろうか。なにしろ、松下電器の社史がそうなっているのであるから、これは一応無理もないことである。

Ⅵ、Ⅶは同じ著者である。この二書にはソケットの写真やさし絵がないので、著者がどちらの製品をイメージして書いているのかは分からない。間違った写真やさし絵がないだけ無難であるとはいえる。

以上を通観すると、Ⅰ、Ⅱの段階では「……プラグ」の名称がおか

しいので、これを「ソケット」と読み替えることでこのジレンマを回避しようとしているのに対し、Ⅲ以降では社史によって右の図式が保証されているために、そのためらいは全く見られない。

豊沢氏がこの誤った認識をさらに補強し、推進したことは前章で見た通りである。

六　事実と二股ソケット伝説の効用

昨年、大阪市東成区（旧、猪飼野町）で「松下幸之助起業の地顕彰会」が結成された頃、「松下さんがこの地でソケット（〝松下式ソケット〟）作りを始めた」という話をすると、多くの人がこれを〝二股ソケット〟のことだと早トチリをするので非常に難儀したものである。

それほど、この二股ソケットの話は世間に行き渡っている。

そもそも、二灯用差込みプラグのように電流を二股に分けるもの、あるいは二灯用クラスターのように胴体を二股に分岐させたソケットは、松下幸之助以前に既に存在した。

『自叙伝』にも、アタチン・二灯用差込みプラグについては先行商品があったことが述べられている。二灯用クラスターについては『自叙伝』では全く触れられておらず、松下が実用新案も取っていないので、これは既にいわゆる〝公知公用〟のものであったと推測される（＝既にある程度世間に知れ渡り使用されている製品等は、誰も特許を取ることができないという規定がある。これに反する出願を〝冒認出願〟といってトラブルの原因となる）。

私が考えるに、アタチンと二灯用クラスターとはいわば対のものであって、アタチンだけでは極めて不自由なものである。アタチン（＝延長コード用の捻じ込みプラグ）を使う時に一々電球を取り外さねばならないというような不便さに、松下幸之助以前の同じ業界の人達が誰も気付かなかったと考えるのは、あまりにも不自然である。

アメリカなどの外国製品が既にあり、日本では例えば石渡電気の石渡幸之輔などがそのコピー製品を割合早い時期（明治四十年代？）から作っていたのではないかと考えられる。なぜかというと、二灯用クラスターのような便利な商品に対して、誰も特許を取っていないからである。これは特許制度の活用が不十分のまま製品が早く出回り、公知公用の状態となってしまっていたからであろう。

もっとも、大正初期の多くの一般家庭の電気事情は定額制で、

「一戸一灯だったから、電灯には長いコードがついていて、配線されている一つの部屋から奥座敷にも、居間にも、夜なべをする土間にも引き回して、一灯で間に合わせた。」（『郷土をたずねて』「郷土に電灯がついたとき」荻田昭次著、長瀬農業協同組合、昭和五十八年。記事は大正二年頃、大阪府東大阪市の事例）

「一戸に一灯申し込みの需要家ではコードを充分に長くして、それまでのあんどん、石油ランプなみに家の隅々まで持ち歩けるようにしたがる。客を玄関に送りだす折、『お足もとが暗うおますよってに』と、座敷の電灯を玄関まで持ちだしたものだ。」

「たまりかねた電灯会社はコードの長さに規程を作ってそれに対処すると、需要家は街の電気屋にたのんでコードを長くしてもらう。」

（『エレキ百年』関寅太郎著、㈳日本電気協会新聞部、昭和四十四年）

という状態であったから、アタチン・二灯用クラスター・二灯用差込みプラグなどの配線器具の需要は、これからまだまだ伸びるという黎明期にあたっていた。

その二股ソケット発明という功績が、なぜ松下幸之助一人に集約されるに至ったのか。

それは、まず第一に松下幸之助起業の動機が失敗作とはいえ〝松下式ソケット〟であり、大開町での創業後の第一号自社製品も二灯用クラスターに係わるアタチン、第二号製品も電気を二つに分ける二灯用差込みプラグであった。また、キー・ソケットの胴体を二股に分岐させた文字通りの（第一次）二股ソケットも実際に考案して実用新案を取っている（これが実際に製造販売されたかどうかは未調査）。

さらにそれ以上に大きな理由は、松下が「国民ソケット」をヒットさせたことであろう。

『松下電工50年史』（松下電工、昭和四十三年）五四～五六頁に、「すぐれた配線器具の開発と大量生産は松下電器製作所創業いらいの一貫した目標であった。この方針に沿って昭和１０年（１９３５）７月発売した〈国民ソケット〉は画期的な売行きをみせ、業界における松下電器製作所の地位を高めるひとつのエポックとなった。（中略）（国民ソケットは）引きひも操作で点滅できる特徴が需要家に喜ばれた。これは今日の蛍光灯器具にまで応用されており、家庭用照明器具の発達に大きな役割を果たしたものであった。（中略）

なお１、２号型は昭和１３年３月、帝国発明協会から有功賞を受ける栄誉に輝き、３号型は戦時中の電力節約用に大いにもてはやされた。」と記されている。

（注）１号型は二灯一差、２号型は一灯一差、３号型は主灯のみのクラスターにそれぞれプル・スイッチが付いたもの。現在３号以外は新型になって１号新国民、２号新国民ソケットと名付けられている。

また、ウェブ・サイト上にも次のような記述がある。

「電灯以外の電気製品はラジオとアイロン、学習用電気スタンドくらいしかなかった。（中略）家の天井には碍子が取り付けられ、むき出しの配線が見えていた。コンセントはなく、天井から下がっている電灯に松下電器のヒット商品である二股ソケットをつけてアイロンなどを使っていた。電灯は点滅するための紐がついていて、寝るときには小さな電球に切り替えることができるようになっていた。」

（『子供の目で見た50年代の農村』「電気製品」より抜粋）

松下の創業当時、配線器具の先発メーカーとして東芝の前身である東京電気が断然大をなしており、東京の石渡電気がこれに次ぎ、大阪のトキワ商会も関西では一流に位していたという（『自叙伝』による）。しかし石渡やトキワはいつの間にか戦線から姿を消してしまっている。

神保電器（東京）は松下と同じ年に創立し、今も配線器具を作っている優秀なメーカーだが規模の点で松下に遠く及ばないようだ。

東芝電材（現・東芝ライテック）からは、松下の国民ソケットとよ

く似た「ホームソケット」という製品が以前出されていた（＝昭和六十一年のカタログによる）が、現在は廃版になっている。

要するに松下電器・電工は起業当初から終始一貫して配線器具に工夫を重ね、そしてこの業界で鎬を削って勝ち抜き今日に至っている。その業績の積み重ねに対して与えられた評価が二股ソケット伝説として世の中に定着しているのだと解すべきであろう。

そして、この伝説の効用については、豊沢氏の言を借りると、

「松下幸之助の二股ソケットの話は、いわゆる発明の内容がわかりやすいことで、いまでは伝説的に真偽とり混ぜて人々に伝えられている。ちょうど義士銘々伝と同じようなものである。（中略）

今日、日本の出願件数は世界の三分の一を占めるというほど多くなった。一つの原因は、このわかりよい話が『このくらいなら私もできる』という身近さを感じさせ、われも人も発明に興味を持ったからである。その点で、この二股ソケットの物語が、いかに教育的効果を発揮したかわからない。」（D、一〇五～一〇六頁）

ということになる。

むすび

松下幸之助が二股ソケットを発明したという話は、半分は真実、半分はおとぎ話と理解すべきである。

松下幸之助は、事実、数々の配線器具・電気製品に対して多くの工夫・考案を行ない、製造販売に力を尽くしてこれらを世界に普及させている。ソケット類だけに限っても、その点は他社の追随を許さない。その実績が伝説を支える原動力となっている。

『水戸黄門漫遊記』がフィクションであることは万人が知っているが、その物語が生まれた発端は、水戸学の源流を作った徳川光圀の人間性への評価に基づいている。二股ソケットの話が伝説であるからといって松下幸之助の価値が毫も損なわれるわけではない。

しかし、物事は筋を通すことが大切ではなかろうか。伝説のモデルになった商品は一体どの商品か、ということは明確にしておく必要があろう。

愚見によれば、それは第一には創業第二号商品の【二灯用差込みプラグ】（『ジュニア版　松下幸之助』でいう「二灯用ソケット」）であり、もう一つは、その後大いに普及した「二灯用クラスター」（ト型およびパンツ型）である。また「差込ト型クラスター」（＝一灯一差、◎⑪）でもあろう。

さらに、この伝説のイメージを拡大したものは「国民ソケット」に違いない。

これらすべてが伝説のモデルであるといえると思う。

松下電器産業では「パンツ型」をシンボルとして前面に出しているが、最近は「ト型」も含め、〝二灯用クラスター（通称二股ソケット）〟という表現に統一されてきている。（本稿では論議を整理するために、「パンツ型」という分かり易い呼称を使用したが、『大阪・大野商店型録（昭和五年）』に拠れば、これの正式な商品名は「松下新型二灯クラスター」である）。

一方、松下電工では『松下電工50年史』の扉の写真に、最も初期の形の「(松下製)ト型二灯用クラスター」を使用しており、これは電工の独自性を出そうとしたものであろう。

この両者はともに二股ソケットであることに変わりはないが、形のユニークさでは前者が勝っているといえるかも知れない。

ただ、この「パンツ型」に対して、創業第二号商品の【二灯用差込みプラグ】と混同した説明が、従来非常に多く見られたということを指摘したわけである。

本稿は、松下電器社史室、同社歴史館、同社ライセンスセンター、松下電工歴品室、PHP総合研究所、大阪府立特許情報センター、特許庁、東京電力電気の史料館、㈳家庭電器文化会、㈳日本配線器具工業会、神保電器技術開発部、往生院民具供養館、街の電気屋さん、友人知人等、多くの方々からの貴重な資料・情報に基づいている。記して感謝の意を表わしておきたい。

(付記)

アタチンの進化(セパラボディ)と二股ソケット

松下電器創業期の商品であるアタッチメント・プラグ(通称アタチン、またはアタチンプラグ)というものを、今日市中で見かけることはまず絶無であろう。

しかし、現在七十歳代以上の人たちにあたってみると、実際に使った経験者が時々おられる。ただ、細かい点まで鮮明に記憶している人は多くないようだ。

昭和3年製小型反射ストーブと付属の回転アタチンプラグ

同右。コードを取り付けた本体から口金部を引き抜いた状態(往生院民具供養館提供)

筆者は幸いにして、記憶の鮮明な、ある一人の方から話を聞くことができた。その方の話に拠れば、「アタチンをソケットに接続する時、普通にやるとコードが捻じれるので、予め逆に何回か捻じっておいてから、ソケットに捻じ込む」のだそうだ。

これはいわば「一体式」タイプのアタチンであって、コードの取付け部分とソケットに捻じ込む口金部分とが一体であるため、アタチンを捻じれば当然コードも捻じれるわけである。松下の最初期(大正七年)のアタチンは〝改良型〟とはいってもこの「一体式」であることには変わりがない。

この、コードが一緒に捻じれる欠点を改善したのが、コードの取付け部分とソケットに捻じ込む口金部分とがフリーに回転する「回転アタチンプラグ」である。これの発売は松下電器歴史館の展示に拠れば

セパラボディ（左）とポニーキャップ（右）（松下電工現行品）

昭和4年発売のセパラブル・アタッチメント・プラグ（松下電器歴史館展示品）

大正八年となっている（実用新案登録番号第６９２３１号のものは大正十一年）。

しかし、どういうわけか筆者は、この回転式を使用したという経験者には未だ出会っていない。回転式は幾分高価であったために、数量的には一体式の方がたくさん出回っていたためであろうか。いや、そうではなく、回転アタチンはスムースに捻じ込めるだけに、却って印象に残っていないだけとも考えられる。この点は今後の調査課題である。

それはともかく、これが次の段階では「分離式」（セパラブル・アタッチメント・プラグ＝同館展示に拠れば昭和四年の発売）となる。

これは、「ソケットに螺合する、脱着式のタップ」とこれに差し込む「（平刃式の）プラグ」の二つの部品で構成されており、この二つの部品は今日でもそれぞれ単独の商品として販売されている。

○前者…セパラボディ（旧名・セパラブル・プラグボディ。松下電工の商品番号【ＷＨ４１０１】）

○後者…ポニーキャップ（丸型の差込みプラグ。同商品番号【ＷＨ４０００】。ポニーの語源は不明）

この二つを組み合わせると、同館に展示されている「セパラブル・アタッチメント・プラグ」と何ら変わらないものとなる。機能的にも外見的にも、アタチンそのものである（ポニーキャップは機能的には普通の平たい形の差込みプラグと異なるところはない。ただ、このタイプでないとアタチンの形状にならないだけのことである）。

この「分離式」が出たために、「一体式」「回転式」のアタチンはかなり急速に廃れていったのではないだろうか。「セパラボディ」がこれに代わって急速に普及していったものと思う。

筆者の知人の奥さん（昭和二年生まれ）は昭和十五年から同二十年まで電器店に勤務していたが、二股ソケット（ト型二灯用クラスター）とセパラボディ、それに三球ラジオが大変よく売れた、二股ソケットは引き紐付き（＝国民ソケット）と引き紐なしとの両方があった、と話されている。

アタチンがセパラボディに変わっても、二股ソケットは（国民ソケットも含めて）相変わらずよく売れていたという様子がうかがえる。

（あじろ・けんじろう　郷土史研究家）